

第 115 回日本外科学会定期学術集会特別企画で発表しました(2015/4/16-18)

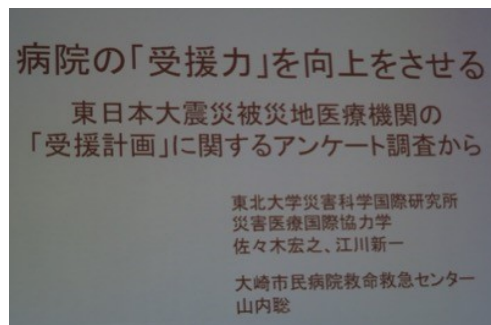
テーマ：メスの限界を求めて Breakthrough the surgical boundaries

場所：名古屋国際会議場（愛知県名古屋市）

2015 年 4 月 16 日(木)~18 日(土)、愛知県名古屋市の名古屋国際会議場で開催された第 115 回日本外科学会定期学術集会の特別企画「南海トラフ地震にどう対応するか—未来に対する災害の備え—」において、佐々木宏之助教（災害医学研究部門 災害医療国際協力学分野）が医療機関受援計画に関する研究成果について発表しました。

日本外科学会は明治 32 年 4 月 1 日に設立された国内でも有数の長い歴史を持つ学会です。会員数 39797 名、会期中 12000 名を越す外科系医師（消化器、呼吸器、心臓・血管、乳腺・内分泌、小児、救急・外傷などの各外科）が一堂に会し、各領域での最先端の治療・研究成果を発表する国内外科系最大の学会です。第 115 回を迎えた今回では 7 つの特別企画が催され、その中の一つ「南海トラフ地震にどう対応するか—未来に対する災害の備え—」で佐々木助教は研究成果の発表と総合討論を行いました。「受援」という言葉自体には耳馴染みはなかったものの、概念として受援計画が必要であるとの認識は多くの医療者がもっており、発表を通して「医療機関の受援計画」というキーワードがさらに広く浸透した印象を持ちました。総合討論では東京医科歯科大学大友教授、鳥取大学本間教授の司会により災害時の外科医の役割、保健活動の重要性、災害医療のディレクター養成などについて活発な討論が行われました。総合討論を通じ、社会の各セクションが「連携」を取り合っていくことの重要性について認識が深まりました。また、日本外科学会定期学術集会において今後も継続して「災害医療」を取り上げて議論していくべきとの共通認識で一致しました。

広域巨大災害が発生した際、その矢面に立つのは災害医療の専門家ではない多くの一般臨床医です。来たるべきその日に備え医療機関として何を準備しておくべきか、どのように支援を受けるか事前準備をしておくことがいかに大切な、当日は多くの一般外科医が熱心に聞き入っていました。



口演タイトル



司会の大友教授（左）と本間教授



総合討論の演者 6 名



総合討論で発言する佐々木助教

文責：佐々木宏之（災害医学研究部門）